

論文提出者氏名 加藤百合

加藤百合氏の「明治期露西亜文学翻訳論攷」は、明治期におけるロシア文学の翻訳・紹介のありかたに、一つの歴史的な展望を与えようとした試みである。

明治期のロシア文学の翻訳については、これまで二葉亭四迷の訳業や内田魯庵訳の『罪と罰』翻訳といった個々の営為について、独立した研究が試みられてきた。だが、明治期のロシア文学の翻訳について、その歴史的変遷を通時的に記述したという点において、本論文が挙げ得た成果は大きい。明治期において、翻訳をめぐるどのような態度があり得たか、どのような翻訳が評価され、評価の態度にいかなる変化があったかが、ロシア文学を例に、鮮やかに跡づけられている点は特筆に値する。翻訳一般についての考察の枠組みを提供しうる研究であり、欧米の文学を積極的に受容した、明治期の日本近代文学に関する比較文学研究への貢献として、高く評価できる。

明治期のロシア文学受容は、たとえば、明治期の英米文学の受容とは、かなり様相を異にする。それは、ロシア語学習をめぐる特殊事情と、それと密接に関係するロシア語修得者の絶対数の少なさに起因する。明治期において、ロシア文学は、英語やフランス語、あるいはドイツ語といった言語を経由して、重訳を通して享受されることが多かったし、重訳への抵抗感もさほど大きくはなかった。目標言語 (target language) としての日本語の訳文の完成度をこそ重んじる風潮があったためでもある。基本的に英語からの重訳であった内田魯庵の『罪と罰』の翻訳が好評を以て受け止められたのも、そのような文学的土壌があったからであった。それが、明治四十年代に昇曙夢が登場するにいたって、事情は大きく変化する。それ以後、ロシア文学はロシア語原典から翻訳することを原則とするようになる。それとともに、翻訳をめぐる態度も、現在のような原典からの翻訳を重んじる姿勢へと変化するようになるのである。

本論文は、第一章「高須治助—日本初訳の露西亜文学」、第二章「二葉亭四迷—初期のツルゲーネフ翻訳」、第三章「森鷗外—創作のための翻訳」、第四章「内田魯庵—協同訳『罪と罰』」、第五章「尾崎紅葉—翻訳に果たした役割」、第六章「昇曙夢—風土・文学・言語」、第七章「誰が翻訳したのか—翻訳による原作の再創造」と、序章及び終章からなる。以下、論文の構成に従って概略を記す。

第一章では、高須治助が明治16年に出版した『露国奇聞 花心蝶思録』が、プーシキン『大尉の娘』のロシア語原典からの翻訳であることを確認した上で、これが省略の多い、文学的には影響力を持ち得なかった訳であったことを論じる。あわせて、当時のロシア語学習の環境を、東京外国語学校露語科の歴史とからめて記述する。

第二章では、既に多くの研究の蓄積がある二葉亭四迷のツルゲーネフ翻訳をめぐる、句読点の使用法等、その「直訳」としての性格を再検討している。この章では、ロシア語原文と訳文との具体的な比較が行われ、加藤氏のロシア語ロシア文学の学識が遺憾なく発

揮されている。

第三章では、ドイツ語からの重訳により多様なヨーロッパ文学を紹介した森鷗外の訳業の意味を考察する。鷗外の作品選択にヨーロッパ文壇によるロシア文学評価が大きな影を落としたこと、鷗外が重訳の意義について何ら疑問を抱かなかったことが確認される。

第四章は、名訳とされた内田魯庵の『罪と罰』の成立について記述する。魯庵は、英訳からの重訳を行ったが、翻訳にあたっては二葉亭四迷に疑問点をただしており、これが二人の協同訳としての性格を有し、質の高い翻訳を実現していることを確認する。この章でも、ロシア語原文、英訳テキスト、日本語訳が具体的に比較検討されている。

第五章では、尾崎紅葉による訳業の意味が再検討される。弟子たちの下訳に抛りながら、日本語の訳文の彫琢に意を注いだ紅葉は、ロシア文学については、瀬沼夏葉の協力を得た。ここでは夏葉の訳業の性格が、夏葉と紅葉の関与の度合いも含めて、具体的に検討される。

第六章では、ニコライ神学校でロシア語を習得した昇曙夢の訳業の意義が記述・検討される。昇曙夢は、自然主義に傾いていた明治四十年代の明治文壇において、ロシアの象徴主義文学を精力的に紹介し、後の世代に大きな影響を残した。また、曙夢にいたって、ロシアの現代文学が、ロシア語原典を通じて翻訳されることになる。また、ロシア文学のみならず、ロシア文化一般に強い関心を示した曙夢の、ロシア学全般が高く評価される。

第七章は、明治四十年代に、上田敏、森鷗外、昇曙夢らによって、競って翻訳されたアンドレーエフの作品を取りあげることで、この時期において、ロシア文学がどのように受容されていたか、また翻訳についてどのような考え方があったかを描き出している。

序章と終章では、このように具体的に記述される明治期のロシア文学翻訳の様態をふまえた上で、作家たちの文体修行の一環としてあった翻訳という営為が、やがては原典の言語に深く通じた、専門的な翻訳家の仕事と位置づけられて行くことになる、歴史的変遷が確認される。

以上のように要約される本論文に対して、審査委員からはまず、明治期のロシア文学の翻訳と受容を歴史的に概観するというテーマ設定自体の、研究史上の意義が認定された。重訳と協同訳、翻訳と創作の関係等に着目した点、現在では忘れられつつある昇曙夢の仕事を再評価した点、語学力を生かして実証的な分析を行っている点なども評価の対象となった。一方で、分析にあたっての用語・概念に再考の余地があること、ロシア文学の受容における明治期の特殊性に一層の考慮が必要であること、個々の章で取りあげられている問題についてさらに掘り下げる余地のあることなどが、具体的に指摘された。また、先行研究へのさらなる目配りが必要であること、書誌の表記等に改善すべき点があることなども指摘されたが、これらはいずれも本論文が持つ本質的な学問的価値を損なうものではないことが確認された。

よって本審査委員会は、加藤百合氏の学位請求論文が、博士（学術）の学位を授与することにふさわしいものであると認定することに、全員一致で合意した。